

祖父への靴下

静岡県・静岡大学教育学部附属浜松中学校 3年
守田 幸平(もりた こうへい)

僕は、祖父のために自助具を作ろうと思った。祖父は去年の夏、脳梗塞で倒れた。祖父は一命を取り留めたものの右手と右足がまひしてしまったのだ。その三週間前、僕も車椅子から転倒して足を骨折した。

僕には障害がある。車椅子で生活することが多い。しかし、僕のことを障害者だといって差別するような友達は一人もいない。

祖父は、歩けるようになりたいという気持ちが強かった。だから、リハビリを頑張り、自分で歩けるようになるまで回復した。頑張っている祖父がかっこいいと僕は思った。祖父は、リハビリを頑張ったにも関わらず右手がうまく動かさなくなってしまった。だから、ご飯を食べる時も服を着替える時も時間がかかる。普段何気なくやっていた動作がとても大変だと祖父は言っていた。僕も何か役に立てることはないかと考えた。

僕の学校には総合学習という授業がある。そこで、僕は、福祉というカテゴリーを選んだ。自分で社会に役立てることを考え、実際に行動することが目標だった。僕は、障害者のために何ができるかを考えた。

僕は、二年前に静岡文化芸術大学で障害者がいかに日常生活で不自由のない生活ができるかを考えるプロジェクトがあるのを新聞で知った。それは、大学生たちが個人個人にあった自助具を作るプロジェクトだった。僕は、障害者のために何かできるのではと感じた。

僕は、静岡文化芸術大学へ行って、僕にもできないことがないかと聞いた。すると、学生さんが自助具を作ってみないかと声をかけてくれた。僕は、迷わず「はい」と言った。障害者のために役に立てることがあると思うと、素晴らしいことだと思ったからだ。

祖父のつらい顔を見ると、日常生活に数々の大きな壁があることが伝わってくる。

僕は、祖父の数々の大きな壁を突き破ろうと思った。祖父のために自助具を考え、作ろうと僕は思った。祖父が靴下の脱ぎ履きが大変だと言っていたことを思い出した。そこで、脱ぎ履きしやすい靴下はできないか考えた。靴下の両脇にひもを取り付けてそれを引っ張ると靴下が縮み、脱ぎ履きしやすくなる仕

組みだ。大学の先生も良いアイデアだと言って褒めてくれた。これは、障害者だけでなく健常者にも使えると言われた。ユニバーサルデザインだと分かった。

ユニバーサルデザインは、年齢や障害の有無にかかわらず、全ての人を使いやすいように工夫された用具などのデザインである。境界がなくなるように健常者が障害者に対する偏見を考え、差別意識がなくなるチャンスだと思った。障害者と健常者が共によりよく生きることが大切だと僕は思った。

自助具の作品展では、杖をついているお年寄り、車椅子に乗った若い女性、目の見えない人、福祉関係者など、沢山の人が観に来ていた。皆、自分の生活を良くしようと思っっているようだった。また、障害者のためにできることは何だろうかと考えている健常者もいるようだった。

二年生の時の総合学習では、二箇所のデイサービスを訪問した。デイサービスには六十五歳以上のお年寄りがいた。暗く元気のない人、明るく振る舞い誰とでも話せる人など、様々だった。しかし、僕が一番印象に残ったのは、笑顔を絶やさず優しくお年寄りに接していた介護士だった。お年寄りの中には、悩みを抱えている人が多いそうだ。その悩みを解消させる人もまた介護士だった。僕は、介護士がお年寄りの体を支えるだけではなく、心もそっと支えて、生きる喜びを与えているのだと感じた。

現代は、三世代で暮らす家族が減り、核家族が増えている。それは、お年寄りの世話が大変だからという理由が多い。だから、老人ホームやデイサービスに預ける人が増えていると僕には思えた。お年寄りの中には自分が嫌われているのではないかとさえ思ってしまう人もいるそうだ。それは、お年寄りにとって辛く悲しいことだと思う。ある介護士がこんなことをおっしゃっていた。「人の優しさはお金では買えない」誰にでも優しい心があると思う。しかし、あと一步のところで行動に移すことができない人が多いのだ。僕たちが平和な社会で暮らせるのは、今まで頑張ってきてくれたお年寄りのお陰であることを忘れてはいけない。お年寄りを大切にすることは当たり前のことなのだ。

また、障害者に対しても偏見の目で見ないで、そっと近づいて手を貸してあげれば、健常者との高い大きな壁を崩すことができると思う。

障害者にも高齢者にも、また健常者にも、人権はある。お互いの人権を大切にすることが、明るい未来に繋がっていくのだと思う。

早く祖父に僕の作った靴下を届けたい。